

青丘文庫研究会 月報

No.272
2014年3月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円
 ※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000円／年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

伯父の記憶・覚え書き 黒川 伊織

伯父は今年 74歳を迎える。中学卒業と同時に塗装店に住み込んだ伯父は、以来 50年以上にわたって塗装工として働き続け、70歳を過ぎて引退した。引退してから、伯父は昔のことをぽつぽつと語り始めた。歴史研究に携わるものとして、伯父の語りをもとにした家族の歴史を、この紙面をお借りして書き残しておきたいと思う。



1940年に生まれた伯父は、生後まもなくから広島市三滝町で育った。近くには国鉄可部線が走っていたという。1945年8月6日、原爆が炸裂したその瞬間は、両親(祖父母)・3歳下の弟(伯父)とともに爆心地より3kmの自宅で迎えた。閃光が走ったとき、伯父はちょうど自宅に入ったところだった。朝から自宅の前で遊んでいたが、祖母にごはんの時間だと呼び戻されたために、辛くも閃光の直撃を免れたのだ。しかし、自宅は全壊し、下の伯父を背負った祖母に手を引かれて、伯父は三滝川沿いの竹藪に逃れた。祖父は倒壊した自宅から布団を持ち出してきて合流した。三滝の竹藪といえば、丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」に描かれたように、原爆投下直後に多くの被爆者が逃れてきた場として知られる。戦前に無産政党運動に関わった祖父は位里と親しく、被爆当時の自宅は、位里の母・スマラの住まいのごく近くにあった。のちに位里・俊が亡くなつた際、伯父はその葬儀に参列しているのだが、「原爆の図」と伯父の被爆体験はこのようなかたちで結びついていた。

このとき14歳の伯母が被爆死したことは、幼い頃から母に聞かされていたものの、どこで被爆したのかという事実関係すら長くわからなかった。広島の下畠準三さんに頂いたヒントで糸口がつかめ、中国電気通信局『広島原爆誌』(1955年)に伯母の名前を見つけたのがこの夏のことである。以下、伯父の記憶と『広島原爆誌』の記述を重ねながら、伯母の被爆死の経緯をまとめておく。広島の通信講習所で電信技術を学んでいた伯母は、8月5日「頭が痛い」と珍しく出勤を済った。しかし、「休め」と言う祖父の勧めを「怒られる」からと振り切って、伯母は広島電信局(現・富国生命ビル、爆心地より450m)に実習生として出勤し、翌朝8時までの当直勤務についた。帰宅の支度をしていたのだろう、原爆が炸裂した瞬間、伯母はまだ電信局にいた。被爆の翌日から、祖父は伯父を連れて市内を探し回ったというが、どこをどう逃げたのだろう、7日後

に比治山近くの防空壕でようやく見つかった伯母は、兵隊により三滝町の自宅跡まで連れ帰られ、家族と再会を果たした。その後、祖父の故郷である瀬戸内海の島に帰郷し、8月31日「頭髪は抜け背部は紫色になって」わずか14歳でその死を迎えた。伯母の写真は1枚も残っていない。小さな墓碑に刻まれたその名の傍らには「勲八等通信事務官」と刻まれている。

敗戦後、家族は島で暮らした。東京・市ヶ谷で生まれ育った祖母にとって、島での生活は想像を絶するものであっただろう。しかし、「革命」を語るばかりの祖父が定職につくことはなく、祖母のニコヨンと内職が、子ども4人を抱えた生活を支えたのである。母から渡された写真の中には、「失対打切反対」と大書したタスキをかけた祖母の姿がある。祖母にはオルガナイザーの能力があったのだろうか、1960年代の前半には呉市にある労組（「全民労働本部」と聞いていますが、ご存じの方ご教示下さい）の婦人部長を務めていたようであるが、まもなく被爆に起因する癌により、53歳で亡くなった。

祖母が亡くなったとき、長男である伯父がようやく20代半ばにさしかかったところだった。前述したように、伯父は中学卒業後すぐに広島市内の塗装店に住み込みで就職しており、蚕棚のようなベッドで眠りながら、ケロイドが刻み込まれた年上の職人たちの下で技術を身につけた。仕事が終われば、広島駅近くのかつてのヤミ市で、ホルモンをかじりながらどぶろくを痛飲した伯父は（そのような店の多くが朝鮮人の経営だったらしく、「朝鮮のおなごは働き者じゃった」と言っている）、祖父譲りの大酒飲みに成長してしまった。高度成長期にさしかかるなか、塗装業は多忙を極めた。伯父の長い塗装工稼業のうちでも、この広島での日々は忘がたく、その記憶の一端を以下に書き留めておこう。

その1、「国鉄の鉄橋を塗りながら広島から下関まで野宿の旅」。読んで字のごとくであるが、寝袋を担いで徒歩で線路沿いを移動し、鉄橋を塗っては野宿しながら、次の鉄橋まで移動する、という繰り返しである。鉄橋の上を歩いていたところ蒸気機関車がさしかかり、逃げるに逃げられず機関車を止めてしまった際には、国鉄に始末書を提出したらしい。

その2、「広島から岩国までサイドカー付自転車で往復？」。岩国の現場で仕事があるときには、広島からペンキを運ばねばならなかつたらしく、伯父の主張では「自転車にサイドカーをつけてのう、一斗缶を積んでピューピュー走つとった」のだそうだ。広島・岩国間は約35km、一斗缶を積んで往復できる距離とは思えないのだが、「サイドカーがついとったら曲がるんが難しいけえ、よう転んだのう」などと本人はすました顔で主張している。

その3、「わしは英語がしゃべれるけんのう」伝説。伯父が米軍岩国基地のカマボコ兵舎の外壁塗装をしていたことから生まれた伝説である。作業が終わると、基地所属の二等兵たち（ほとんどが黒人兵だったそうだ）がシャワーを浴びるよう勧めてくれ、その際にどうにかこうにか意思疎通をはかっていたことが、「英語をしゃべれる」という伝説を生んだらしい。「ヘイボーイゅうてシャワー浴びせてくれたのう」「（二等兵にタバコを勧めた際）しんせいは「いらん」言つたが、ピースをやつたら喜んどったのう」などなど、岩国基地での日本人塗装工とアメリカ人二等兵の「会話」は、意外に弾んでいたようである。

伯父がカマボコ兵舎を塗っていたのは60年安保の直前であった。そして10年後、その妹（私の母）は、ベ平連の一員として岩国基地での反戦運動に関わることになる。母のベ平連経験を知

ったのは数年前のことなのだが、最近の私は、神戸におけるベトナム反戦運動の研究に取り組んでいる。本研究会のメンバーである飛田雄一さん・堀内稔さんが関わった「ベトナム反戦運動」を手がかりとしてはじまった私の研究は、北爆開始直後に神戸大の小島輝正先生らが結成した「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」の活動、そして戦後神戸における社会運動の展開を通時に見通す視点へと拡がり続けている。

このようなかたちで家族の歴史と私個人の歴史研究の関心のあり方が呼応していることは個人的事情にしか過ぎないと言われるだろうが、しかし歴史研究の原動力は、身近な家族の記憶を辿りたいという個人の意志によるところも大きいのだろう。実際、伯母の被爆死の経緯を調べたのは、伯父が亡くなったらこの世に生前の伯母を記憶する人は誰もいなくなってしまうことに気づいたからだった。家族の記憶と社会の記録を切り結んだなかに自らの研究を置き直す、そのようなかたちの歴史研究に取り組んでいくことが、惑つてばかりの30代を終える私の次なる目標なのである。

在日朝鮮人運動史研究会編

『在日朝鮮人運動史研究』 43号 2013.10 B5 211頁 緑蔭書房 2520円

※特価2000円で販売します。購入希望者は、下記郵便振替に送料160円とも2160円を送金ください。郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>

●「釜の墓標、全5章一挙上映

日時：4月13日（日）／会場：神戸学生青年センター

第一章「朱鞠内」（114分）9:00～／第二章「浅茅野」（98分）11:00～

第三章「遺族」（109分）13:00～／第四章「未来へ」（121分）15:00～

第五章「私たち」（107分）17:10～

料金：全5回3000円、1回1000円

●第七回強制労働員真相究明全国研究集会、「強制労働員問題解決への道」

日時：2014年3月15日(土)13時～18時／16日(日)午前 フィールドワーク

場所：立命館大学衣笠キャンパス 充光館B1講堂

共催：強制労働員真相究明ネットワーク（学生センター内）

立命館大学コリア研究センター

資料代：1000円（学生500円）／懇親会 18時～20時 会費 3000円（学生1500円）

フィールドワーク 3月16日(日) 「京都市左京区・朝鮮ゆかりの地を歩く」

案内：水野直樹さん／9時30分集合（叡電「出町柳」駅改札口）／12時30分解散

（「出町柳」駅）／コース：「韓国合併奉告碑」（八幡三宅八幡神社）、八瀬の

ケーブルカー、尹東柱詩碑（京都造形芸術大学）、田中の朝鮮人集住地区（卓庚鉄の家）など

参加費無料（叡山電鉄電車賃520円は各自ご負担ください）

●「釜の墓標、全5章一挙上映

日時：4月13日（日）／会場：神戸学生青年センター

第一章「朱鞠内」(114分) 9:00~/第二章「浅茅野」(98分) 11:00~

第三章「遺族」(109分) 13:00~/第四章「未来へ」(121分) 15:00~

第五章「私たち」(107分) 17:10~

料金: 全5回 3000円、1回 1000円

●現代キリスト教セミナー「若手研究者による東アジアキリスト教史研究」

② 3月14日(金) 午後6時30分

「日本メソヂスト教会の権太伝道」 関西学院大学大学院 大和 泰彦さん

③ 3月28日(金) 午後6時30分

「中国朝鮮族教会の形成と現状」 在日大韓基督教東神戸教会伝道師 韓 承哲さん

④ 4月11日(金) 午後6時30分

「日本聖公会の在朝日本人伝道(1880年-1945年)」

延世大学神学部大学院博士課程 松山 健作さん

会場: 神戸学生青年センター TEL 078-851-2760

参加費: 600円/ 主催: 神戸学生青年センター

●青丘文庫研究会のご案内●

■第347回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2014年3月9日(日) 午後1~3時

「在日の精神史」を考える 尹健次

■第292回朝鮮近現代史研究会

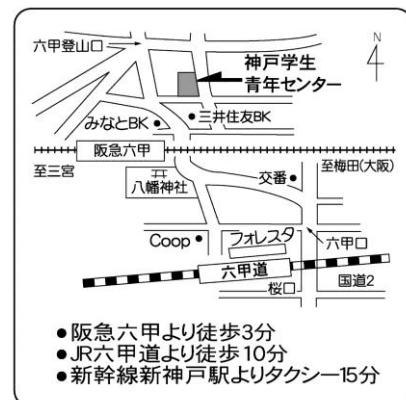
2014年3月9日(日) 午後3~5時

「北朝鮮の政治と権力~金日成の権力闘争の一断面」李景珉

※会場 神戸学生青年センター(阪急六甲下車徒歩3分、JR六甲道下車徒歩10分)

TEL 078-851-2760

※神戸市立中央図書館耐震補強工事のため3月は青丘文庫を使用できません。



【今後の研究会の予定】

■4月以降の予定です。4月13日(日)、在日(高野昭雄)、近現代史(未定)。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

4月号以降は、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- 暑い夏、大雪、不純な気候が続いているが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。月報1月、2月は、メールニュースに替えさせていただきました。青丘文庫研究会メールニュースをご希望の方は、飛田雄一 hida@ksyc.jp までメールをお願いします。